



裁判長
認印

第五号様式(本人調書)

事件の
表示の
平成
五年
(ワ)第
三
四
九
号

最高裁印 四号の一

本人調書

この調書は、第一四四回口頭弁論調書と一体となるものである。

裁判長は、宣誓の趣旨を告げ、本人がうそをいった場合の制裁を注意し、別紙宣誓書を読みあげさせてその誓いをさせた。

期日	氏名	年齢	職業	住所
平成 八年 五月 二二日 午前 一時 三〇分	朴 [REDACTED]	一九三〇年四月二三日生	無職	大韓民国慶尚南道 [REDACTED]

宣誓その他の
状況



陳 述 の 要 領

裁判所速記官田邊直美、同田中なゝほ作成の速記録のとおり

裁判所書記官 此木 田



「陳述の要領」の記載の末尾に、裁判所書記官が記名押印すること。

原本番号 平成六年民第一四号の五

速記 録 (平成八年五月二二日第一四回口頭弁論)

事件番号 平成四年ワ第三四九号等

原告本人氏名 朴 ■ ■

原告ら代理人(李)

1 朴 ■ ■ ■ さんは、一九三〇年四月二三日に生まれましたか。

ええ、このときに生まれました。

2 両親は、あなたが子供のころどのような仕事をしていましたか。

お母さんは家事で、お父さんは農業をしていました。

3 朴 ■ ■ ■ さんのきょうだいは何人いましたか。

三名おりました。

4 朴 ■ ■ ■ さんはその中で何番目でしたか。

二番目です。

5 三人のきょうだいのうち、学校に行ったのはだれですか。

三人とも行きました。

6 では、朴■■さんが荒木志庸という名前になったのはいつですか。

国民学校、小学校二年生のころから改名になったと思います。

7 朴■■さんが通っていた国民学校は、朝鮮人ではない日本人はいましたか。

日本の方はおりません、全部朝鮮人です。

8 では、日本人の学校は別にあつたのですか。

すぐ隣に日本人学校がありました。

9 では、朴■■さんが勤労挺身隊というのを最初に知ったのはいつですか。

富山に行つて分かりました。

10 それは、勤労挺身隊という言葉を知つたんですか。

そのとおりです。

11 どういう理由で、朴■■さんは勤労挺身隊として日本に行つたのですか。

五年生のときに影山先生から、当時は成績もよかったし、背も高かったですから、日本に行つたらもっと勉強もできるし、あるいはそういう生け花もできるから、行つたらどうねという勧めがありました。

12 日本に行く前に働いた経験はありますか。

学校だけで、別に働いておりません。

13 では、日本に行く前に、家を長期間離れたことはありますか。

いや、それは一度もありません。

14 では、影山先生が朴■■■さんに対して、日本のどこに行くと言明しましたか。

ただ日本だということ、日本だけを知っております。

15 陳述書によれば、日本に行けば、生け花や学校にも行くことができる、一番先に行くのが一番有利だという説明を影山先生から受けましたか。

だから、影山先生から聞いたものですから、喜んで、一番でやってやろうということになりました。

16 その国民学校るとき、影山先生の言うことであれば何でも信じていたんですか。

特に私は先生の言うとおりに聞きましたから。

17 では、国民学校るとき、朴■■■さんのお父さん、お母さんの言うことと、影山先生の言うことと、どちらを信じていましたか。

これは、言うまでもなしに、影山先生のほうを信用いたしました。

18 それはなぜですか。

いろんなものを教えてくれますし、学校における時間と家における時間は学校における時間が長いですから、自然と情が移って、そういうことで影山先生の言うことを聞くようになりました。

19 あなたは影山先生に、愛国することだということで、日本に行くように勧められましたか。

特に、この愛国することだと言われたことから、なお行くようになりました。

20 その愛国とはどういうことですか。

天皇陛下によくやることが愛国だと信じておりました。

21 そのころ、日本に行くころ、朴■さんは、日本が戦争してることを知っていましたか。

大東亜戦争は知りませんが、戦争をしてるからということで、慰問文を送ったり兵隊さんに何かというようなことで、戦争をしてることは知っていました。

22 では、日本がどこと戦争をしているということを知っていましたか。

当時は米兵撃滅という標語があったものですから、アメリカと戦争して
ると思いました。

23 では、日本の工場に到着して、それが富山の不二越という工場だと分かったのは
どうしてですか。

だから、その会社に入って寮に行って、初めてここは不二越の会社で
あるということが分かりました、実際はその不二越という意味もよく分
かりません、当時は。

24 その意味が分かるようになったのは、何かきっかけがありますか。

当時は家に手紙を出すときに、封書に、表書きに不二越と書かなきゃい
けなかったものですから、ああ、これが不二越だと、今でも内容はよく
知りません、意味もよく分からないんですけれども、当時は封筒に書い
たりしたことで覚えております。

25 では、その工場に着いて、まず最初に何をしましたか。

行った当時は、細い針金を切るんですけれども、一日のノルマが六〇〇

○本から八〇〇本と決められてやりました、もしこれが勤務中に終わらなかつたら残業もいたしました。

26 では、その仕事、陳述書によれば、ターレットという仕事をする、その割当てを朴■さんが決められたのはどうしてですか。

機械にも書いて張ってありましたし、監督の方からこれはターレットだということの説明してくれました、それで分かりました。

27 工場の中には、いろんな機械とかいろんな仕事場があるんですが、そのターレットの機械を朴■さんが扱うようになったのはどうしてですか。

体が弱かったものですから、健康な人は旋盤をやりましたけれども、私は弱かったために、これというようなことでターレットの仕事をさせられました。

28 体が弱いというんですけれども、何か病気か何かあったんですか。

それは、病気はなかったんですが、食べ物足らなくてどうしても弱かったものですから、そうなったと思います。

29 それは、体格が細いとか、体重が軽いとか、背が小さいとか、そういった弱いと

いう意味でしょうか。

そういうことは詳しくはないんですけれども、見かけ、一見弱く見えたからそうだったと思います。

30
で、そのターレットの機械が決まるのは、そこに挺身隊として働きに行った女の子たちが旋盤になるかターレットの作業になるか、それはそういった見た目の体格とかで決まるんですか。

見るからに体格がいい人は重たい鉄を持ってるような、そういう旋盤になったり、私は細いものですから、弱いように見える者はターレットのような仕事をやったと思います。

(以上 田 邊 直 美)

31 工場に朴■■さんが最初着いたときに、工場の中を見学しましたか。

はい、全部見学をいたしました。

32 そのときまでに、不二越の工場みたいな場所を見たことはありませんか。

ありません。

33 初めて不二越の工場を見たときの感想を言ってください。

初めて入ったことで、ここで実際に何をするんだろうか、というような不安がありました。

34 最初工場内を朴■■さんが見学して回ったとき、旋盤の機械やターレットといった機械、そういったものはだれが作業をしていましたか。

一見、どうも挺身隊じゃなくて、家庭から通ってるような、二つ三つ上のような方たちばかりが働いていて、中には男性もおったと思います、こういう方たちがやっております。

35 家庭から通っている女学生ということじゃないですか。

中には結婚した方もおったやに思います、全部学生かどうかは分かりません。

36 朴 ■■■ さんのように、一三歳、一四歳の女の子たちは働いてましたか。

当時私が見たときには、私のような若い、幼い人はおりませんでした。

37 韓国から勤労挺身隊として仕事に来ていた人たちは、最初見たとき、いましたか。

工場の中には見当たらなかったんです。多分、当時、同じに来たころじ

ゃないかと思いますが、京畿道の人とか馬山の人とか、そういう方たち

に、寮で、寄宿舍でお会いすることができました。

38 ターレットの機械の仕事は、実際にやってみると、どうでしたか。

一日のノルマが六〇〇〇本ないし八〇〇〇本です、大変きつうございました。

39 では、影山先生から説明を受けていたことと、違うと感じましたか。

完全に違いました、全然、聞いたことと違いました。

40 先ほど、朴 ■■■ さん、柳 ■■■ さんの話を聞いて、朴 ■■■ さんも、不二越の工場では同じような仕事や生活をしてきてたんですか。

ええ、そのとおりでございます。

41 では、影山先生の説明と全然違うと、そう思っても、仕事を続けましたか。

約束が違いましたけれども、国家に忠誠を尽くしてきたわけですから、しなければならぬと思つてやりました。

42 では、その仕事に朴■■■さんは誇りを感じてましたか。

ターレットをやる時には、本当に満足感を味わいました。

43 そのターレットというのは、何の部品とかになるものなんですか。

長さが大体韓国のおはしなんです、直径三ミリ、二ミリぐらいじゃないかと思いますが、それを、五センチないし一〇センチの棒に切ったんですね、それをずっと切つて、飛行機の部品を作るんだということでした。

44 それは戦争に使う飛行機の部品ですか。

戦争に使う飛行機の部品だということでした。

45 そういつた説明を、だれから受けましたか。

係長さんから聞きました。

46 そういつた戦争で使う飛行機の部品を作ることをやることを、愛国のためと信じて、誇りに思つてやつてたわけですか。

腹は減っても、これは国のためだと、そういう誇りを持ってやるもの
すから、喜んでやりました。

47 朴■さんが、不二越で働いてる途中、病気で仕事を休んだことがありますか。
空襲のために怖くなりまして、それから病気にかって休んだことはあ
ります。

48 どういった病気ですか。

不眠症にかかりまして、ほんのちょっとした物音があっても、びっくりし
て起きたり、そういうような落ちつかない、早く言えば恐怖症のような
ものにかかりました。

49 病気になって病院には行きましたか。

病院には行きましたけれども、病名は出ませんでした。

50 仕事をその病気で休んだのは、どのぐらいの期間ですか。

一か月ほどは、もう、ずっと寝たきりでした。また、当時、手もけがし
ておりましたから、一か月ほど寝ておりました。

51 それは、どこで寝ていましたか。

52

寮の中では患者さんが寝る部屋があります。その部屋に泊められました。何か薬を飲むとか、注射をうつとか、どんな治療を受けましたか。

寮長じゃなくて、その下に働いてる先生だと思いますけれども、朝一錠、夜一錠、そういうように、一ぺんにたくさんくれませんでした。その都度その都度もらって飲みました。

53

その都度その都度というのは、一か月休んでた間、毎日、朝一錠、夜一錠、薬をもらってたんですか。

そのとおりです、一ぺんにくれなくて、その日その日に、朝と夜いただきました。

54

その薬を飲むと、どうでしたか。

飲んだとたんに力が抜けて、何にも分からなくなって、ずっと寝てしまいます。

55

今思うと、その薬は何だと思えますか。

今考えることに、神経衰弱の安定のために、つまり安定剤のようなものと思います、今も飲んでおります。

56 では、その病気で一か月間寄宿舎の寝る所で休んでたとき、朴■■■さんは何を考
えていましたか。

影山先生から、国家のためにということ、そういう使命感に燃えてお
りましたから、一日も早く回復して、早く仕事にかからなければと、こ
れだけを思っておりました。

57 毎日毎日薬を飲んで、一か月もの間寝てたわけですから、そうやって仕事に戻れ
ない自分をどう思いましたか。

もう、ばかみたいな考えでございました。どうかして早く起きて仕事に
かかりたいと思っておりました。

58 では、病気で寝てて、工場の人から、朴■■■さんは病気だから、もう、家に帰し
てしまおう、というような話を聞いたことはありますか。

そのとおりでして、よかったらもう帰そうじゃないかと、そういうふう
な話が持ち上がっておりました。

59 それを耳にして、朴■■■さんはどう思いましたか。

みんながおるのに自分だけ帰るということは、本当は我が家に帰ってお

母さんの懐に飛び込みたかったわけですが、みんなを思えば、自分だけ
ゆうゆうと帰るわけにはいなくて、どうにかして、起きて働かなけれ
ばと、無理を承知して起きて仕事をしました。

60 その後、朴■■■さんは韓国の家に戻りましたが、どのようにやって不二越から韓
国に帰りましたか。

一応帰るときはみんな一緒にしたから、どうせ一緒だから、帰って、帰
宅して、それから、また戻りなさいというようなことで帰りました。

61 不二越から韓国に帰るという話は、韓国に帰るというふうに告げられたんですか、
工場の人からか。

そういうことは聞いておりません。

62 ただ船に乗りなさいということで、不二越を離れたんですか。

ええ、そのとおりで、ただ船に乗れということで、船に乗りました。

63 どこに連れて行かれると思いましたか。

寮の中では伺っておりませんが、船に乗ったときに、疎開するんだとい
うことは、初めて船のなかで耳にしました。

64 船に乗せられて、着いた所はどこか分かりましたか。

清津は知りませんが、沙里院という所は分かりました。

65 どうして分かりましたか。

もちろん沙里院と言うたから、それで沙里院と分かりました。

66 沙里院が韓国の中のどこにあるのかというのは、そのとき分かってましたか。

朝鮮の歴史を勉強しておりませんので、分かりませんです。

67 その後、家のほうに帰っておきなさいという指示が出たのは覚えていますか。

沙里院に着いて、講堂で二日ほど泊まって、うちに帰りなさいと、いったん帰郷しておいて、あと連絡がありましたら戻りなさいということは、そこで聞きました。

68 一回家に帰りなさいと、連絡あるまで待ちなさいと、そう言われたときは、どのような気持ちでしたか。

お母さんにも会えるし、お父さんにも会えると、郷里に帰られると、幼いころで、一方では、そういう、帰ることはうれしいという気持ちもありました。

69 では、もう一方にはどういう気持ちがあったんですか。

日本が戦争で勝って、そして、またおうちに帰りたいと、そういう片一方の心は持っておりました。

70 日本が戦争に勝つてというのは、その勝つことに、朴■■■さんは何か力を貸すことが出来るんですか。

それは心であって、一つ一つ言えません。

71 日本が、その後、戦争に負けたことは分かりましたか。

三日ぐらいしたら行くんだと思っていたときに、解放だと、韓国でヘイバンと言ってますが、当時は解放が何か分かりませんでした。

72 周りの韓国人が、解放だ解放だと、喜んでいたんですか。

当時は韓国の旗を持って、みんな、解放解放と叫んでおったので、あれは何言っとるんだろうかと、本当に子供だったと思います、分かりませんでした。

73 日本が戦争に負けたということは、それで分かりましたか。

完全に日本が負けたというまでは知りませんでした。

74 その後、日本が戦争に負けたというのは知りましたか。

いとこに当たるお兄さんが東京の明治大学に留学しておったんですが、その兄さんが帰られまして、兄さんに聞いたそうです、兄さん、解放て何ですかと、このばかが、解放も知らんか、ということ、実は日本に行きたいと言ったら、日本が負けたのに何で行かなきゃいけないのかと、いうことで、その兄さんから聞いて初めて分かりました。

75 それを聞いて、朴■さんはどう思いましたか。

アメリカが憎くてしようがありませんでした。

76 では、日本に対する感情は、そのときどうでしたか。

一生懸命日本を応援もし、天皇のために一生懸命忠誠を尽くしてきたのに、負けたということは本当に残念に思いました。

77 朴■さんは、そうやって、残念に思い、アメリカが憎いと感じたのに、周りの韓国の人たちは、解放だ解放と喜んでいたわけですか。

ただ、周囲を見てたら、気が狂ったじゃないかと、男も女も、何であることをしてるのかと、そういうふうには、憎くも見えませんでした。

78 そのとき、朴 ■ さんは、韓国が日本の植民地になっていたということを知って
いましたか。

私は、小さいときから日本人として育ってきたものですから、その内容は
存じ上げておりません。

79 では、韓国が、日本の植民地の前に、独立した国だったということは知ってまし
たか。

それも分かりませんでした。

80 先ほど言った、親戚のお兄さんが解放の意味を教えてくれて、そのとき分からな
かったことが分かったんですか。

一七歳になって職場生活をいたしました。その職場生活の中に、書物があ
ったり、本を読んだりして、徐々に徐々に過去の歴史的なようなものが分
かってきました。まあ、胸にわだかまりのようなものはありました。

81 では、そうやって、自分が一七歳で職場に出て、働きに出て、いろんな書物に触
れて、それで分かるまでは、その親戚のお兄さんから話を聞いただけでは、解放
の意味であるとか、日本の植民地に韓国がなっていたとか、日本が戦争に負けた

だとかいう話は、信じれなかったわけですか。

別に、兄さんがそう言うたからで、それを信頼するとか、せんとかいいうことはありません、よく分かりませんでしたから。

82 信じることができなかったということですか。

半信半疑でした。

83 先ほど言った、一七歳になって職場に出て、本を読んで、歴史を勉強して初めて分かった、そのときに事実だと信じたんですか。

そういうことで、職場に行ってやっと分かってから、ああ、お兄さんが言うたことが正しかったんだ、本当だったということが分かりました。

84 そうやって、いろんな歴史的な事実が分かったそのときに、朴■さんは、日本の国、あるいは、日本の不二越も含めて、そういうものに対してどういう気持ちを持ちましたか。

影山先生が、幼いときに本当に悩みそにたたき込んでおいたようなものですから、常に悩みそのどこかに、それは幾らか常に潜んでありました。日本にすまなかったな、悪かったなというふうに思っていました。

85 自分が悪かったんですか。

つまり、日本が負けたからかわいそうだという意味です。

86 日本がかわいそうだと、そう感じてたわけですか。

そういうことです。

87 では、そのころ、歴史を知らながら日本がかわいそうだと思ってたころ、朴さんは、自分が挺身隊として日本の工場で働いていたことを、周りの韓国の人たちに話すことができましたか。

一切秘密でおりました。

88 それはなぜですか。

当時、日本に渡ったら、みんな慰安婦になるんだというようなことを、よく、流言的なことがあったと思いますが、そういうことがあったものですから、私たちは、本当は不二越に行って一生懸命働いて帰ってきたけれども、もしやして、みんなと同じ、あるいは、そういう慰安婦のよきな感じで見られてはいけないと思ったから、一切、日本に行ったこと、仕事したことは、秘密として言いませんでした。

昨日、僕と話をしたときのことを聞きますけども、挺身隊で日本の工場で働きに行ったということを周りの人に話せなかったという理由として、韓国の人たちにそういうことを話すと、戦争のとき日本に味方してたんではないかと、そう責められるということが理由だった、ということと話したことは覚えていますか。

要は、慰安婦という言葉がよく出ていたので、ひょっとして、間違って、慰安婦のように取られたら困るから、それだけで一応秘密にしておりました。

挺身隊で働きに行ったことは、その後、結婚したご主人さんや、子供たちにも秘密にしておったんですか。

ずっと秘密で過ごして来ました。

そういった、自分が日本で働いたこと、挺身隊として愛国のために働いたことを周りの人に話すことができなかった、それは何か心の重荷になりましたか。

確かにそのとおりです。ずっと胸の中に収めていたものですから、それは確かに体によくなかったと思います。今でも、そういう電話のベルが鳴ってもびっくりしたり、いろんな、韓国でも、カグラのようなものを

やったりして、一生懸命治療に努めております。だが、当時隠していたことが、やはり体に悪くなったと思います。

92 日本の工場に挺身隊として働きに行ったということを人に話したのは、いつですか。

私たちが行ったときには五人行きました。そのあと何十人も挺身隊が行ったそうです。でも、その行った子供たちにも一切、そういう人たちにも秘密にしております。

93 自分が日本の挺身隊として働きに行ったということをも、もう、秘密にしないでいいと思ったのはいつですか。

いつかテレビを見ましたら、慰安婦と挺身隊とは別々だということでした。テレビで出てきたので、自分の息子だけには事情を話して、こうこうだということ、日本に行くということを、やっと話をして参りました。

94 それは、今からどのぐらい前のことですか。

ここに申告したときですから、いつになりますか、それは、私、分かりません。ここに初めて書類を提出したとき、初めて言いました。

95 それは五年も一〇年も前のことですか。

三年から四年ぐらい前じゃないかと思ひます。

96 今回、この日本での裁判に原告として加わったのは、どういう理由からですか。

幼い私たちを影山先生がだましたようにしてしまつたという悔しさ、それから、やはり、日本政府は、当然のことながら、私たちが働いた分は補償すべきではないかと、そういうことを思つたものですから、申告して参りました。

97 働いた分の給料を払ってもらうのは、補償してもらうのは、日本政府の責任だと、そう考えたわけですか。

軍事工場でしたが、日本の戦争用の飛行機を造るために軍事工場に日本人たちが連れて行つた、だから、日本のほうが責任があるかと思ひます。

98 今まで、工場で働いて挺身隊だというふうにな乗りをあげるまで、約五〇年間の間、日本が戦争に負ければ日本がかわいそうだと思つてた、そういった気持ちじゃあ、給料を払ってくれと、補償してくれという気持ちに変わったのは、何か

あるんですか。

もちろん私もそうですけど、神経衰弱で弱っていますけれども、娘も一〇年もかかって神経衰弱にかかっております。日本のために一生懸命尽くしてきたつもりです。心のどこかには、本当に日本も気の毒であったなという気持ちもあります、が、自分が働いて、一生懸命国のために尽くした分だけは、やはり日本政府も当たり前として、私たちに補償すべきではないかと思ったから、この申告と一緒に賛同したわけです。

甲第一二号証を示す

99 これは日本語で書かれた朴■■■さんの陳述書ですが、一番最後にある金文淑さん、この人に、この内容を韓国語で話したものを聞いたことはありますか。

はい、聞きました。

100 その内容は、あなたが話をしたことになってますか。

そのとおりです。

原告ら代理人（山本）

101 朴■■■さんが国民学校でどういうことを習ったかということをお聞きしたい

んですけども、国民学校では朝鮮語を習ったことがありますか。

一年生までは習ったような記憶があります。

102 そのあとは全く習ってないんですか。

そのあとは朝鮮語というのはございませんでした。

103 すべての授業は日本語で行われたわけですね。

ええ、全部そうでございます。

104 友達どうし朝鮮語で話することはできましたか。

秘密でやりよって、ばれてから、罰則くらったことがあります。

105 話してはいけないことになってたんですね。

朝鮮語で言うてはいけなかったということでした。

106 朝鮮語を話してるのを先生にみつかり、どんな罰を受けたんですか。

むちで手をたたいたり、あるいは、足をたたいたり、あるいは、手を上げて罰で立たしたり、あるいは、トイレの掃除をしたりという罰をくらいました。

107 朝鮮の歴史を習ったことがありますか。

全然ありません。

108 例えばハングルを作った人が世宗大王だということを学校で習ったことがありますか。

ありません。

109 日本の歴史を習いましたか。

習いました。

110 例えば、歴代の天皇の名前を覚えたことがありますか。

覚えていました。

111 それは今でも覚えていますか。

覚えています。

112 最初の幾つか、ちょっと差し支えなければ。

神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝靈……

113 それを学校の歴史の授業で覚えさせられたんですか。

歴史の授業で。

114 教育勅語というのでも覚ええましたか。

はい、それも習いました、分かっています。

115 皇国臣民の誓詞というのも覚えましたが。

そのとおりです、やりました。

116 それは、毎日唱えさせられたんですか。

毎日唱えさせられました。

117 そのような教育を受けて、当時、天皇に対してどういう気持ちを持ってましたか。

常に天皇陛下には忠誠を尽くさなければいけないと思っていました。

118 あなたは、先ほども、愛国するために日本に行った、愛国するために頑張ったということと言われましたけども、それは、そういう天皇に対する気持ちを実行したということなんですね。

当時はずっとそのとおりに思っておりました。

(以上 田中なゝほ)

山口地方裁判所下関支部

裁判所速記官 田邊直美

裁判所速記官 田中なゝほ



[→HOME](#)